

「彼方」をめぐる——レヴィナスにおける「彼方」と理念性——

京都大学 佐藤義之

レヴィナスは他者の他性を極限にまで突きつめて考えようとした。彼によれば他者は存在すること(essence)の彼方のものであり、時間という全体の彼方のものとして「隔時的」(diachronique)なものだという。本発表では、『存在するとは別の仕方、あるいは存在することの彼方に』の議論を中心にして、他者の超越性をめぐる思考を批判的に検討したい。

レヴィナスによれば西洋の哲学は存在のための努力という利己的な動機を背景としてもつ。知覚をはじめとする認識活動は自己保存のための活動であり、存在者を存在者として認識することも、そういう活動の一環である。学問もそういう活動の延長線上にある。

一方、倫理的な他者とのかかわりは利己性と衝突するがゆえに、倫理性——とりわけレヴィナスの主張する、他者を自分自身より尊いものとみなす自他非対称的倫理性——は、こういう西洋の哲学によって組織的に無視されてきたという。つまり、西洋の哲学は経験的ないしア・プリオリな手段で確証され、存在者として認識されるものだけをこの世界にあるもの、学問の対象とみなし、それ以外をまさに「存在しないもの」、学問の対象に値しないものとみなす。他者の非対称的尊厳は、こうして「存在者」としての他者に根をもたないものとして無視される。

西洋哲学の観点に立てば、レヴィナスが主張する真の他者の核心部分は、「存在者全体」である時間の外に位置するということになる。しかし「存在者全体の外」など矛盾であろう。こうして他者に対する真の倫理性は排除される。それに対し彼は、自らの学問を一種の「懐疑論」として規定する。彼は「自己矛盾」という懐疑論へのお決まりの罵倒をひきうけ、自覚的に「自己矛盾」を犯しつつ、西洋の哲学の絶対他排除を批判するのである。

彼はその批判のために、存在者の成立から解き明かそうとする。私が注目したいのは、その議論において彼が、存在者を同一性をもつ存在者として構成するためにことばが不可欠だと述べていることである。この議論は、動物でも存在者を同一性をもつものと認識しているであろうことを考えれば、奇妙にさえ見える。なぜ彼はこのような主張に固執するのか。この点を突きつめていけば、彼が譲れなかった一点が見えてくる。私見によれば、彼がこの主張を通じて論じる「存在者」とは、動物でもかかわりうるような、単なる知覚的日常的な存在者ではない。そうではなく理念的な同一性をもつ存在者である。全体としての時間についても同様である。こういう理念的な同一性をもつ存在者は、言語的にしか構成できない。これが言語にこだわる理由(のひとつ)である。ではどうしてこういう理

念的な存在者の構成に執着するのか。私はそれは、他者や時間をこのような理念的な同一性をもつものとして理解してはじめて、それらをひとつの「全体」としての意味をもつものと考えることができるからだと考える。理念化によらず単なる知覚的なレベルにとどまるなら、「全体」を主体が取り戻すことはできず、掛け値なしの「全体」を主張できない。

むろん、「全体」が重要なのは、その「全体」をこえるものとしてはじめて「彼方」ないし「絶対的他」を想定できるからである。レヴィナスは絶対的に他なるものを「彼方」に想定するが、彼の考えではその彼方とは絶対的なものであり、一切の彼方、全体の彼方ではない。「全体」が「彼方」の踏み台として前提される。

しかし、ここであらためて問い直してみよう。このような「全体」は、理念化によって獲得されたものである以上、日常実践においても、知覚のなかでもあらわれてこない。だとすれば「全体」は現象学的に真剣に扱うべきものか疑わしいと言わざるをえない。

ここで生じる大きな問題は、もしこうして「全体」が否定されてしまうなら、それを踏み台とする「彼方」も危うくなるということである。というのも、レヴィナスの「彼方」は、「全体」を否定することによってなりたっているのではないからである。全体はある意味真の全体であるということを彼自身認める。だからこそその裏をかくには、「懐疑論」という自己矛盾的な手段に頼るしかないというのである。彼は「全体」を批判しても否定しない。否定してしまえば、他者は「絶対他」といえなくなるからである。

最後に私は、「全体」の否定を前提としながら、レヴィナスの考える他者の倫理的実質である、非対称的責任を迫るものとしての性格を剥奪しないで他者を考えることはできないか検討した。つまり、他者を考えるにあたって、「全体」や「彼方」の概念によらないで、しかしなおかつ彼のいう西洋哲学の利己性の論理を踏襲しない可能性を探った。私の見通しでは、それは実践面ではとりわけ困難ではあるが、不可能とは思えない。